家庭・福祉部会

研究主題　　生徒一人一人の実践力を高める指導の在り方

Ⅰ　研究の目的

1　昨年度の成果と課題

家庭科、福祉科には、知識や技術を習得させるとともに、それぞれ「生活や社会の発展に向かう創造的能力・実践的態度」(家庭科)、「社会福祉の増進に寄与する創造的能力・実践的態度」(福祉科) を育成するという目標がある。昨年度の「東京の教育２１」家庭・福祉部会は、これらの目標達成に向け、生徒自身による到達度評価及び授業改善のための授業評価について事例研究を行い、評価について工夫改善が必要であることを指摘し研究開発を行った。

2　本年度の研究の目的と研究の進め方

本年度は、研究主題に「生徒一人一人の実践力を高める指導の在り方」を掲げ、生徒の意識・意欲・行動等の変容に着目した生徒による到達度評価と授業評価の開発、また校内研修会等で使用できるように、授業改善に向けた教員間の授業評価について開発することとした。

そこで、本研究では、対象分野を「食物」と「福祉」に設定した。「食物」については、現代の食生活の乱れ・偏りから「食育」への期待が高まっていることから、普通教科「家庭」の指導内容でも食生活を重視している。また、食生活は、毎日の生活に直結するので、生徒の実践力を測るのにも適していると考えた。一方「福祉」については、近年の少子高齢化を反映し、専門教科「福祉」、普通教科・専門教科「家庭」のいずれにも含まれる分野であるが、それぞれの科目の指導内容をどの程度指導すべきか、各科目の関連はどうなっているのかについて改めて整理を行った。その上で、教科・科目ごとに目標を整理し、「家庭総合」(普通教科・家庭)、「家庭看護・福祉」(専門教科・家庭)、「社会福祉基礎」(専門教科・福祉) における高齢者介護について、それぞれ授業でどのように展開するか、授業研究を行うこととした。

Ⅱ　研究の方法

1　実践力について

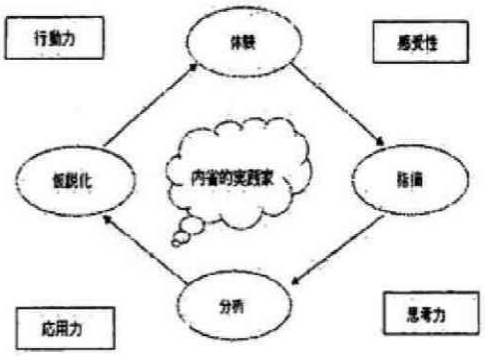
本研究では、利便性の増した生活環境の中で生活学習が少なくなっている、情報量の多さに比べ実践の場がない、家庭の中での役割が少ないなど、生徒の今日的課題を踏まえ、「授業を通して得た基本的な知識・技術を、自発的に生活の中で生かすことができること」を重視し、これを「実践力」と名付けた。高校生の生活環境は多様であるが、自分の生活の中で学習成果を活用できること、即ち実践力を身に付けることが、家庭や社会生活の充実向上に向けた第一歩となり、これからの社会をたくましく生きるには不可欠であると考える。

実践力は、実践に対する意識があり、実践すべき内容と方法を理解していなければ発揮できるものではない。そのためには、生徒一人一人が授業を通して何を得たかを明確に把握することが重要である。そこで、生徒による授業評価、到達度評価、教員相互の授業評価を活用することとした。なお、授業後の意識や行動の変容については、「プレチェック」、「アフターチェック」(食物)、「振り返りシート」(福祉) をそれぞれ使用した。

2　ラボラトリーメソッドについて

授業展開に当たっては、ラボラトリーメソッド（注１）による体験学習を新しく導入した。ラボラトリーとは、南山大学人文学部心理人間学科の津村俊充氏によると「他者との関係を創り出しながら、自分自身のことや人間関係そのものをその中で主体的に学習する場」のことである。ラボラトリーメソッドによる学習は、《いま、ここ》での自分の体験を他者とともに総合的に検討することによって変化・成長を生み出す形式なので、「（まさに）体験（を通しての）学習」とか「参加型学習」あるいは「態度学習」と言われる。ラボラトリーメソッドによる体験学習には、「仮説」、「体験」、「指摘」、「分析」という４つの構成要素が考えられている。例えば、献立作成学習の場合、「バランスのよい献立を立てる」（仮説）→「献立に基づき実際に調理する」（体験）→「実習結果について発表する」（指摘）→「各班の献立について評価する」（分析）という学習の流れである。この過程で個々の生徒は自己の知識や価値観を内省的に考察する。その結果、自己の食生活を見直す、食に対する関心が高まるなどの変化及び成長が生じる。単に知識や技術の習得にとどまらず、実生活へ向かう内面的変化をもたらすラボラトリーメソッドは、「生徒一人一人の実践力を高める指導」という、本年度の主題にふさわしい指導法である。そこで、体験学習のサイクルを生かしながら授業を展開し、生徒の変容や成長をみることとした。

図１　体験学習のサイクル



注 1)南山大学人文学部心理人間学科　津村俊充「学校教育にラボラトリーメソッドによる体験学習を導入するための基本的な理論と実践」

3　「授業評価」を生かした授業改善

授業改善のために生徒による授業評価が有効であることは言うまでもない。生徒による授業評価については、昨年度の本研究でも取り上げたが、各学校・各教科において様々な評価票が工夫されている。本研究では、教員相互による授業評価を行うため、授業評価票を開発した（表１）。この授業評価票には、実践力の育成という観点を盛り込んだが、１単位時間の授業力を全般的に評価することを主眼としている（所属校や教科が異なる教員間で評価することを想定）。この授業評価票は、目的に合わせ、評価観点、評価項目、実施回数、時期等を選定し、教科研修や校内の研修に活用することが可能である。評価は、「とてもそうだ」、「ある程度そうだ」、「あまりそうでない」、「全くそうでない」の４段階で行うこととする。

生徒理解	生徒の実態（生活・個性・関心・レディネス等）を把握している。
	身近で、授業後に実生活に生かせる教材・教具等を選定している。
	生徒個々及び全体とのコミュニケーションができている。
	生徒の意見・反応を大切にしている。
授業展開	学習内容や課題を明確に示している。
	心地よいリズムでメリハリのある授業展開がされている。
	学習の進み方・時間配分が適切である。
	考える時間の確保等、生徒の主体的参加を大切にしている。
	学習成果を日常生活に生かせるよう関心・意欲を喚起したり発展的に応用する方法を例示している。
指導力	学習しやすい雰囲気づくりを行っている。（環境整備等）
	適切で分かりやすい言葉をつかっている。
	目線や立ち位置等に工夫し、生徒全体に目配りがされている。
	学習内容をフィードバックできるよう板書等工夫している。
	達成感・自己評価等を活用し、実践への発展が期待できる指導計画を立てている。
	疑問を創造的に発展させる等、深い識見や情熱が感じられる。

表１　授業評価表（教員相互）

4　「プレチェック」「振り返りシート」について

本研究では、前述した「実践力」の程度を知るための指標について考察を行った。一定の知識・技術量が生活の創造の前提となる「食物」分野と、意識・情動の変化が行動や生き方に反映される「福祉」分野について、異なる指標と測定方法を考えた。

「食物」については、学習活動を始める前段階に知識・技術・関心等を調査する「プレチェック」（表２）を行う。プレチェックは、「正しい知識が身に付いているか」、「具体的な実践を行っているか」、「発展的な内容について興味や関心があるか」の三分野をそれぞれ二分割し、計六分野について各五問程度を設問し、正解数や該当数の結果をレーダーチャートグラフに示すというものである。視覚的に各自が自分の優れているところや不足しているところが分かるので、生徒のみならず一人一人の生徒の状況を把握する上で、教員にとっても価値ある資料となる。答え合わせや解説を通して知識の獲得もできる。学習対象が身近に感じられる等の効果もある上、アフターチェックを行うことで、生徒個々の学習成果や変容を通して「実践力」を測れることが期待される。

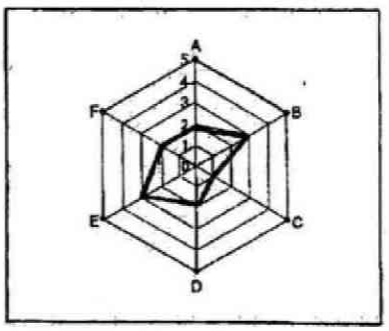
「福祉」については、「振り返りシート」（表３）を使用する。このシートは、興味・関心、知識・技能、実際の行動の三分野について、自己の変容を生徒自身が記述するものである。授業前・授業中間・授業後の変化を追うことで、個々の学習状況や変化を把握でき、授業の分析・改善への活用が図れるものである。

表２　プレチェック（食物）

A、B、E、Fの正解をもとに項目別の得点を求めてみよう。

A	栄養および食品の知識	2
B	調理に関する知識	3
C	調理に関する実践	1
D	日頃の食習慣	2
E	食文化・マナー	3
F	食の安全・環境	2

その結果をレーダーチャートに出き表してみよう



この結果を見ての感想を書いてください

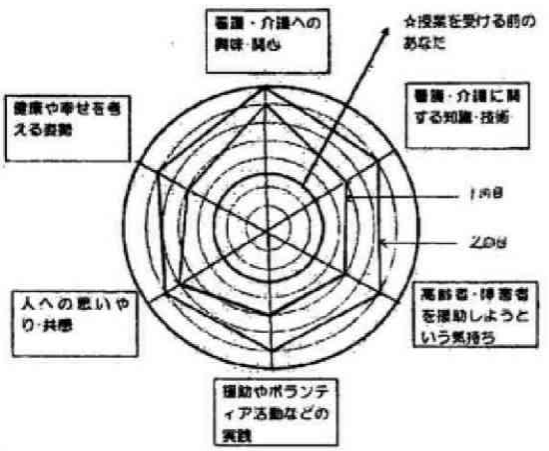
調理に対して、あまり関心がない。やろうやろうと思って結局親まかせになっているので、積極的に料理を手伝い、覚えていきたいと思った。

マナーなどは、親やテレビで少し知っていることもあった。

表３　振り返りシート（福祉）

自己ふり返りシート（家庭看護・福祉）

下の円チャートはあなたが「家庭看護・福祉」の授業で何を学んだか、どのように変わったかをふり返るためのものです。６つの項目について、内側の太い線を授業を受ける前の状態だとした場合、今どの位置にあると思うか記入して下さい。また、下の空欄にそのように記述した理由等について自由に記入して下さい。



チャート記入の理由等

前から看護・介護への興味はあったけれど普通教命講習を受けたり、老人ホームに行って体験した今、以前抱いていた興味関心とは違うから、人を助けようとかいうのを学んで人への思いやり・共感を学ぶことが将来に役立てたいです。

授業にせもらした。正直がに生かしたいです。

氏名（　　）

Ⅲ　研究の内容

1　「食物」編～「家庭総合」・食生活の科学と文化～

（１）題材名　「献立の作成」

（２）題材目標

栄養、食品、調理などについて科学的に理解させるとともに，食生活の文化に関心をもたせ、必要な技術を習得して充実した食生活を営むことができるようにする。

（３）本時の題材名「献立計画」

（４）本時の指導目標

① 食材をバランスよく組み合わせて献立を作ることができる。

② 健康、味、視覚、時間、食材の魅力、栄養、調理変化、環境、消費経済などの視点から食品を選択できる。

（５）題材の指導計画（６時間）

指導項目	ねらい	学習内容	学習形態	評価の観点			
				関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
仮説化 献立作成 (2時間)	・献立（昼食）を作成する ・バランスについて考える。	・献立作成で考慮すべき視点を整理する。	①講義 ②献立作成	・食品群や一汁二菜を考えて献立作成に取り組んでいる。	・献立改善について考えることができる。	・献立作成ができる。	・献立作成の方法、必要な調理方法、調理技術を理解している。
体験 調理実習 (2時間)	・準備、調理手順と片付け等調理作業の流れを確認する。	・作業能率がはかどるよう調理計画を把握する。	実習	・実習技能を高めようとしている。	・実習の目的、作業内容を理解している。	・調理の作業能率向上に努めている。	・実習結果を客観的に捉え、評価できる。
指摘・分析 栄養バランス評価 (2時間) 〈本時〉	・食品摂取量、価格、廃棄量、時間、価格、健康面について意見交換する。	・意見交換がしやすい雰囲気作りを心がける。	①講義 ②ｸﾞﾙｰﾌﾟ学習 ③討議	・様々な観点から献立を捉え、判断できる。	・バランス評価の目的、作業内容を理解している。	・まとめの内容について、適切な表現で発表できる。	・作業内容を理解している。

（６）本時の展開（全２時間　５０分×２時間）

区分	学習活動	教師の指導・支援	評価の基準と評価方法
導入 １０分	（1）本時の学習内容を理解する。	・前回の実習報告書を返却する。	・前回の作業内容を理解している。
展開 ４０分	（2）実習報告書をまとめる。 班ごとに提示資料を作成する。 ①食品群別摂取量の目安の充足率 ②環境（ゴミ、農薬） ③時間 ④予算 ⑤写真	・３人グループの編成。 ・工夫した点などを考えさせる。 ・黒板に完成した献立・料理の写真を掲示し、実習の内容を振り返ることができるようにする。 ・画用紙、サインペン、マグネットなどを用意する。	・バランス評価の目的、作業内容を理解しているか。 ・様々な観点から献立を捉え、判断できたか。 ・作業内容を理解しているか。
３０分 １０分	（3）班ごとに実習結果について発表する。（各班２～３名）	・発表するポイント（①から④の内容を必ず含む）を伝える。 ・欠席者のいるグループには、役割分担等を提示し、発表者の意欲を高める。	・まとめの内容について、適切な表現で発表できたか。
	（4）評価・投票する。 ①各班の献立について検討する。 ②各班の作成した献立を評価し投票する。	・投票の準備をする。	・様々な観点から献立を捉え、判断できたか。
まとめ １０分	（5）全体の感想をまとめる。	・講評する。・日常の食事では、誰かが献立作成を工夫していることに気付かせる。	・実習結果を客観的に捉え、評価できる。

（7）まとめ

今回は、食物の知識や技術、行動を総合的に捉えることを献立作成の目的とした。献立を作成する学習には、「作成時間が十分に確保できない」、「評価の観点が栄養だけに偏りがちで、栄養以外の作成要素基準が不明確である」等の問題がある。そこで、栄養だけに絞らず、指導内容を経済性や環境問題にも広げ、数多くの要素を盛り込み、一汁三菜や五味、五色などについても考えを深める授業を展開した。

班ごとに話し合いながら献立を作成する過程においては、生徒は個々の食の好みや能率、技術や彩り、分量の変更などに配慮しながら作業をしていた。これらの行動を学習者全体の共通理解としてまとめていく時間を確保することができれば、献立作成の基礎基本と献立作成の応用的な概念を確実に定着させることができる。

調理実習後の授業では、献立作成の理由を班ごとに発表した後、生徒間の相互評価を投票という形で行った。栄養バランスは食品群別摂取量（4群）で、経済性は作業時間と価格で、環境は発生したごみの重量でそれぞれを数値化した。投票の観点としては、「栄養バランス」、「経済性」、「環境面」などとし、その総合点で評価した。生徒の相互評価の結果では、栄養バランスが優れている班の献立については、高い総合評価に結びつかなかった。例えば、和風ハンバーグの献立を立てた班では、普通のハンバーグよりも栄養バランスがよいにもかかわらず、作業時間がかかるために全体評価は低くなった。また、スパゲティの献立の班では、材料費が低価格で調理時間が短時間であったために総合的に高い評価になった。今回の栄養評価を数値で評価することは、生徒にとって調理時間やごみの量などに比べて、難しかったといえる。4群の摂取量での比較よりも、摂取カロリーや食品数など一つの数値で評価した方が栄養面が反映されやすくなる。また、授業展開の工夫、発表後の整理方法、発表のための事前指導などについては、授業者が作業内容を精選し、作業見本や発表の趣旨などを明確に示せば、より意欲的に取り組めるようにできる。

また、生徒の行動目標は、「栄養バランスなどのさまざまな観点から献立を捉え判断できる」と設定することにより、達成できる。しかし、栄養バランスに対する「判断」については、生徒の判断が不十分であったため、今後の授業で理解を深め、栄養バランスの必要性を強調する必要がある。

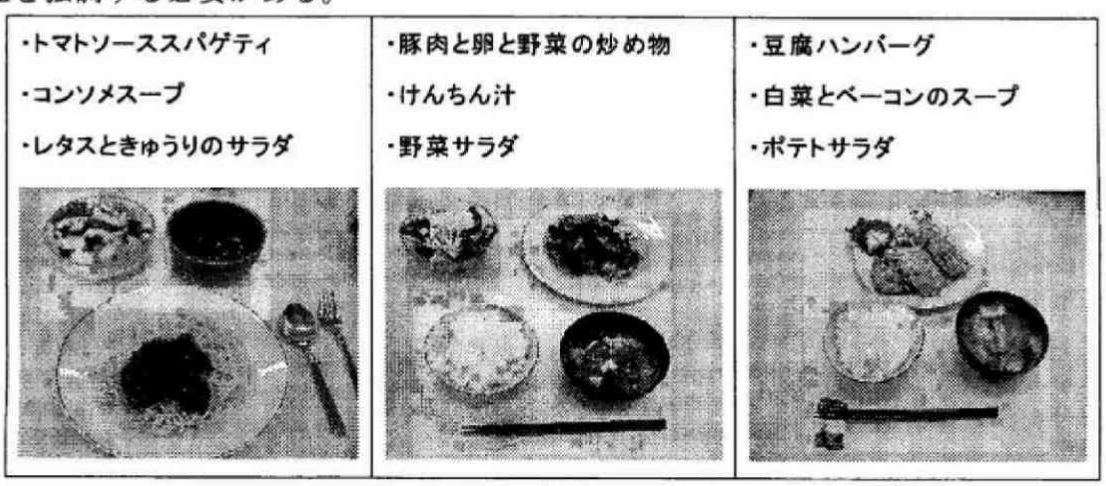


写真1　各班の献立の記録（一部抜粋）

2　「福祉」編

（1）三科目の比較

普通教育及び専門教育に関する教科「家庭」及び「福祉」には、高齢者に対する介護や看護を扱う科目がある。それらの科目「家庭総合」、「家庭看護・福祉」、「社会福祉基礎」について、それぞれの目標・内容に照らした特徴的な単元を設け、授業展開を図ってみた。

表４　三科目の比較表

	家庭総合	家庭看護・福祉	社会福祉基礎
科目の目標	人の一生と家族、子どもの発達と保育、高齢者の生活と福祉、衣食住、消費生活などに関する知識と技術を総合的に習得させ、生活課題を主体的に解決するとともに、家庭生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。	病気の予防と家庭看護、高齢者の介護などに関する知識と技術を習得させ、家族や高齢者の健康管理とともに、家庭看護や高齢者介護の充実を図る能力と態度を育てる。	社会福祉に関する基礎的な知識を習得させ、現代社会における社会福祉の意義や役割を理解するとともに、社会福祉の向上を図る能力と態度を育てる。
対応する内容	（高齢者の生活と福祉） ①高齢者の心身の特徴と生活（加齢に伴う変化、生活の現状と課題、適切なかかわり） ②高齢者の福祉（高齢社会の現状と課題、高齢者福祉の基本理念、福祉サービス、家族・地域の役割） ③介護の基礎（体験的） 高齢者介護の心構え、コミュニケーション等	（高齢者福祉の制度とサービス） ①高齢化の進展と社会福祉 ②高齢者福祉の法律と制度 ③保健・医療・福祉サービス （高齢者の自立生活支援と介護） ①高齢者の心身の特徴 ②自立生活支援の考え方 （家庭看護と介護の実習） ①家庭看護の実習 ②介護の実習	（社会福祉分野の現状と課題） 高齢者・障害者福祉 地域福祉 （社会福祉の担い手と福祉社会への展望）
単元	高齢者を招いての交流活動	高齢者の自立支援と介護	独居高齢者を地域で支える
ねらい	近隣の高齢者を授業に招き、実際に対話すること（生活、時代の変化、福祉や高校生への期待等）を通し、高齢社会の現状や課題を学ぶ。高齢者に対する共感の思いを育て、介護や福祉理念に関する興味・関心を高める。	施設での体験学習を挟み、介護を必要とする高齢者に接する態度・敬意を育てるとともに、社会的感受性、コミュニケーション能力の開発を図る。認知症高齢者等に対する理解を進め、「人間の尊厳」を守る介護の在り方について関心や意識を高める。	「最期まで自宅で暮らしたい」という思いに応えるための方策を考えながら、高齢者福祉制度や地域福祉資源への理解を深める。地域福祉の担い手としての自己の責務についても考えさせる。

（2）「家庭総合」における福祉教育の授業展開

ア　単元名「高齢者の生活と福祉」

イ　単元の目標

高齢者の心身の特徴と生活、高齢者の福祉などについて理解させるとともに、介護の基礎を体験的に学ぶことを通して、高齢者の自立生活を支えるために家族や地域及び社会の果たす役割について認識させる。

①　加齢に伴う心身の変化と特徴について理解させるとともに、高齢者の生活の現状と課題について認識させ、高齢者との適切なかかわりについて考えさせる。

②　高齢社会の現状と課題について考えさせ、高齢者福祉の基本的な理念と高齢者福祉サービスについて理解させる。

③　日常生活の介助を体験的に学ぶことを通して、高齢者介護の心構えやコミュニケーションの重要性について認識させ、高齢者と適切にかかわることができるようにする。

ウ　単元の指導計画（全１４時間　本時３．４時間目）

指導項目	ねらい	学習内容	学習形態	評価の観点			
				関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
仮説化 高齢者を理解する① （2時間）	加齢に伴う変化を体験し高齢者の生活を理解する。	インスタントシニア体験	実習	高齢者擬似体験に積極的に取り組んでいる。	高齢者の心身の特徴の一般的変化と個人差について気付くことができる。	高齢者とのかかわり方についてまとめることができる。	加齢に伴う心身の変化と特徴について理解することができる。

体験 高齢者を理解する② （2時間） 〈本時〉	高齢者とのコミュニケーションを図り、異世代間での情報交換を行う。高齢者を理解しようとする態度を身に付ける。	高齢者を招いて交流活動（異世代間コミュニケーション）	グループ学習	高齢者の生活に関心をもち、適切にかかわろうとしている。	高齢者の生活の現状と課題について具体的に考えることができる。	高齢者と適切にかかわり、心身の特徴や生活の現状について聞き取ることができる。	高齢者の生活実態について理解することができる。
指摘 高齢社会を知る （2時間）	高齢社会の現状を理解し、今後の課題について考える。	高齢社会の現状と課題 振り返りシート記入	グループ討議	高齢社会の現状や課題について考えようとしている。	我が国の高齢化の特徴を踏まえ社会の果たす役割について気付くことができる。	聞き取りをもとに高齢社会の現状と課題について調べ、発表することができる。	高齢社会の現状や課題について理解することができる。
分析 生活支援と地域福祉 （2時間）	地域福祉に関する仕事をしている方と直接話をすることにより、今自分にできる事は何かを考える。	社会福祉協議会の役割 ボランティア活動	講話 講義	自立支援の在り方などについて考えようとしている。	近隣の高齢者の状況を踏まえ、自分達にできることは何かを具体的に考えることができる。	地域の高齢化や自分達にできることは何かをまとめることができる。	高齢者福祉の基本的な理念と福祉サービスの概要について理解することができる。
仮説化 高齢者を介護する① （2時間）	加齢に伴う変化を考慮し、食べやすい食品・献立を考え、調理する。 介助方法を工夫する。	高齢者の食事の計画	実習	高齢者の食事について関心をもち食べやすい献立及び食事の介助について考えようとしている	日常生活の介助についての具体的方法や留意すべきことについて考えることができる。	高齢者が食べやすい献立について考え、調理することができる。	高齢者に対する共感の大切さを理解することができる。
体験 高齢者を介護する② （2時間）	ボディメカニクスを活用し車イスの操作及び介助方法を身に付けさせる。 介護しやすい住環境を考える。	体位変換 車イスの介助 バリアフリー	実技	介護の心構えやコミュニケーションの在り方について考えようとしている。	高齢者の立場に立ち、安心して住める住環境について考えることができる。	要領よく体位変換及び車イスを操作することができる。	安全な体位変換及び車イスの操作を身に付け、配慮すべきことを理解することができる。
指摘 ノーマライゼーション （2時間）	身近にあるユニバーサルデザインに気付かせ、ノーマライゼーションの理念を認識する。	ユニバーサルデザイン 視覚障害者による点字教室 振り返りシート記入	講話 実習	誰もが暮らしやすい生活環境について関心をもち、環境整備に積極的に取り組もうとしている。	身近なユニバーサルデザインに気付き、誰もが使いやすいモノについて具体的に考えることができる。	基本的な点字の使い方を知り、いろいろな表現の仕方について考えることができる。	障害者の生活を理解するとともにノーマライゼーションの理念を理解することができる。

（3）「家庭看護・福祉」における福祉教育の授業展開

ア　項目名　高齢者の自立生活支援と介護

イ　本時の題材名　自立生活支援の考え方

ウ　題材目標

介護を必要とする高齢者に接する態度・敬意を育てるとともに、高齢者福祉に主体的に取り組む態度、社会的感受性、異年齢とのコミュニケーション能力の開発を行う。高齢者に対する理解を深め、「個人の尊厳」を守る介護の在り方について、関心や意欲を高める。

エ　題材設定の理由

進行する我が国の少子高齢化の現状と課題を理解させるとともに、高齢者との交流を通して、生徒のコミュニケーション能力の向上を図ることをねらいとして、本題材を設定した。

オ　本時の指導目標

高齢者施設体験の個々の体験をグループ討議（KJ 法的手法による）で共有化する過程で高齢者個人の生活の歴史を知ることは、個人の尊厳を守る介護の実践となること、また、自立支援は高齢者に生きる意欲をもたせることを理解させる。

カ　単元の指導計画

「家庭看護・福祉」の授業では、年間を通してラボラトリーメソッドを活用し、体験学習のサイクルを組み込んだ指導を行った。社会的感受性を育てるための第一の体験として、インスタントシニア体験、車いす試乗、施設見学、普通救命救急講習、自由課題ボランティアを行い、高齢者施設体験学習を前に、体験学習のサイクルにあてはめ、生徒個々に積極的に高齢者とかかわるための目標を立てさせた（仮説化）。事前学習は、思考力や、コミュニケーションスキルを高めようとする内容で、敬意を示す態度、話し方を学ぶことができる VTR や絵本などを活用するとともに、生徒相互の意見交換も取り入れ、生徒の経験を共有化できるようにした。本時の特別養護老人ホームでは、５０名のデイサービスの高齢者に対し、少人数による２班に分かれ、体験以外の班は、ケアワーカーの方の話を聞くこととした。A 班は、リコーダーの、B 班は校歌の練習をし、自己紹介とともに披露してから、高齢者の中に入った。本時はグループごとに、付箋（ふせん）を使い感想を書き並べ共有化を図る内容である。本時に至るまでの展開を示す。

展開	ねらい	学習内容	学習形態	観点別評価			
				関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
体験前期 5+α時間	・生命について考える。 ・体験学習を通し、尊い生命を救うことができることを理解する。 ・高齢者を知る。	応急手当 普通救命講習（一年次インスタントシニア、車椅子、施設見学） 自由課題「ボランティア」	構造化されたグループ学習	講習に意欲的に参加している。 ボランティアのリーダーになり、計画を立てることができる。	緊急を要する判断力の必要性を理解している。	応急手当、心肺蘇生、自動体外除細受動器を正しく実習することができる。	生命の尊さを感じ、救命活動の重要性を理解している。
指摘 2時間	・体験学習の振り返り、内省と共有。 ・高齢期の心身の変化を理解する。 ・生命について考える。	共有した時間と空間の確認 コミュニケーションの話題 班毎の仕事や課題の確認	講義、ワークシート記入、振り返りグループ討議	病気・怪我の予防に関心をもち、高齢化による心身の変化に関心をもつことができる。	高齢者の心身の変化について理解できる。	実習の目的を理解し内省をワークシートに記入できる	話し合いを通して、他者理解、気付きを共有できる。
分析 2時間	・高齢者の健康と病気について理解する。 ・自立支援と介護について理解する。	ともに生活する心構え、介護、援助、支援を知る。	講義 VTR視聴	高齢者の特徴に関心をもつことができる。高齢者福祉にかかわろうとする態度が見られる。	ノーマライゼイションについて考え、正しい判断ができる。意欲、心のあり方の大切さに気付く。	ことば使い、接する態度の大切さを知り、思いやりある態度を表現できる。	高齢者の在宅福祉・施設福祉の現状について理解している。
仮説化 2時間	・主体的に高齢者とかかわろうとする意欲を育てる。 ・高齢者の自己決定に基づく自立生活支援が重要であることを理解する	老人ホーム体験に向けて自分自身の目標を立てる。高齢者との積極的かかわりを準備する。（自己紹介、歌の発表などの練習）	講義 VTR視聴 グループ討議。絵本音読	人間の尊厳について関心をもち、意欲的に目標を立てられた。	施設実習を通して高齢者を支援することができること、自分も人間関係能力が向上できると理解している。	実習の目的をワークシートに記入できる。きちんとかかわりの練習をすることは敬意を示すことにつながる	要介護者の状況に応じた自立支援の方法について理解している。
体験 4時間	・地域交流。高齢者とのふれあい。ディサービスの方の生活の歴史を聞く。 ・ふれあいを通して、個人のプロセス(内面)を見る目を養う。敬意を示す態度をとることができる。 ・特別養護老人ホームを知る。	2チームに分かれる。①ディサービスを知る。②ホームの方の仕事体験談を聞く。 高齢者のそれぞれが異なる人生経験をもつことに気付く。 個人名で呼ぶ	①デイホームの方とのふれあい実習 ②講義 名札をつける。	個々の高齢者の様子を把握し、積極的にかかわることができた	高齢者の意欲を引き出すための考察をした。	自己紹介を通して心を通わせることができる。歌・リコーダーを心をこめてできる。車椅子を正しく扱うことができる。うまく手を引くことができる。	老化に伴う様々な障害について知ることができる。認知症について知る。施設の仕事を理解する。
指摘 本時 2時間	・体験学習を通して、高齢者のプロセス（生活の歴史）を知り、そのプロセスに働きかける力、そのプロセスに生きる力を育てようとする態度を育てる。 自立生活支援は、人間の尊厳を守る援助であることを知る。	高齢者とのかかわり方・認知症のビデオ視聴。高齢者それぞれが異なる人生経験をもつことに気付く。（海に浮かぶ氷山） 自己決定が不可能な場合どうするか	視聴覚教材ビデオ。絵本の活用。グループ討議。色別カード記入→分類→共有テーマ発見	体験学習の目標について、ふりかえる。これからの自分の在り方、生きる意欲を育てる高齢者とのかかわりについて考えることができた。	プロセスは作られることを知り、30,60年後の自分について、年のとり方、生き方について考え、進路目標をたてることができた。 認知症などで、自己決定できないときの事を想像し、考えることができる。	高齢者福祉の課題について、自己の考えを発表することができる。	個人の尊厳とは、一人一人が異なる存在であり、一人一人の感情や意思や生き方が大切にされることを心で理解する。

キ　本時の展開（全２時間　４５分×２）

区分	学　習　活　動	教　師　の　指導・支援	評価の規準と評価方法
導 入 １５分	（1）本時の学習内容と目標を確認する。 ・体験学習振り返り ・目標の達成状況を確認する。絵本を通し、海に浮かぶ氷山の例を知る。	＜出席番号順＞ ワークシート記入（課題資料） ・絵本を読む。絵本の高齢者の認知症が回復するきっかけについて考えさせる。	・施設の高齢者それぞれが、個々の異なる人生観をもつことを感じたか。 ・個人名を覚えてきたか。 ワークシート記入ができる。 （コンテントとプロセスを知る。）
展 開 ６０分	（2）学習者自身が体験したこと確認し、他の人と共有する。 ＜グループ討議＞ ①気付きをカードに記入 ・デイホーム利用者・高齢者の話 ・コミュニケーションの話題 ・施設の設備、仕組み、働く人の事 ②カードのグループ分け ③グループに一行見出し作り ④班ごと発表 ⑤授業目標についての討議 ３つの柱 ・　生きる意欲 ・　個人の尊厳 ・　自立生活支援	＜グループ別＞ KJ 法的手法によるカード記入（付箋） 討議のルール確認 ①守秘義務②傾聴の姿勢③強制しない④否定しない ・個人の気付きではなく、共に体験したメンバーの気付きも共有し合う。(偏った視野に陥らないために重要)（指摘＝非難にしない） ・体験したことの中から、自分と他者（高齢者）との関係やグループの様子を見定める、見つけ出す。 ・高齢者施設体験から学んだこと。	・共に体験した人の気付きを理解している。 ・高齢者個々のプロセスを知ることは出来たか。 ・認知症を理解している。 ・高齢者とのコミュニケーション能力は、相手を敬う心、自分も心を開き、寄りかかる心から始まることを知る。 ・1時間の施設体験学習で、個々のプロセス知ることはむずかしいことに気付く。
まとめ １５分	（3）本時のまとめ これからの自分 ・　高齢者とのかかわり ・　３０年後 ・　６０年後 次回の授業の連絡 ・高齢者の食事、献立作成	・個人の尊厳を守るかかわり・姿勢とは、個々人のもつプロセスを大切に思う心であることを伝える。 ・自立生活支援は、人間の尊厳を守る援助であることを伝える。	・個人の尊厳を守るとは、一人一人が異なる存在であり、一人一人の感情や意思や生き方が大切にされることを理解している。 ・どのように年をとるのか、生き方を考える。

高齢者施設での体験学習の後、感想をグループで共有しあう生徒たち（KJ 法的手法を用いて、個々の感想・疑問を次々と自由にカードに記入していく→グループ化し、タイトルを付ける）

写真２　話し合いの様子

ク　まとめ

今回の研究では、概念学習だけではなく、実践力を育てる体験学習をラボラトリーメソッドのサイクルを活用し行った。「自分は高齢者とふれあうことができるのか」、「手を握り共感することができるのか」という自己理解・他者理解を求める内容であった。

施設体験時、自己紹介したことにより、「学校はどこにあるのかい」などの問いに対して、コミュニケーションが上手く取れた生徒もいた。リコーダーを一生懸命練習したことは、高齢者を敬う行為であったことに気付く生徒も多くいた。逆に話しかけても返事をしない高齢者や、施設の愚痴（ぐち）をいう高齢者もいることから、ありのままの相手を受け入れることが、個人の尊厳を守る行為であること、相手の要望に気付き援助することが自立支援であること等、生徒はからだと心で理解できる授業であった。

振り返りシートには、「看護・介護に関する技術や思いやりはあっても、なかなか行動にうつせない。でも、倒れた人に声をかけたり、電車の中で席を譲ることはできると思う。」「実際に体験したことで考え方が大きく変わった。」などの感想があった。

本時では、KJ 法的手法を用い、意見・気付き・感想を書かせたが、まとめが難しく、付箋が混在してしまうことになった。健康が大切であることなどの気付きはあったがそれぞれの将来を考えることは難しかったようである。

Ⅳ　研究の成果と課題

1　「プレチェック」「振り返りシート」を活用した授業改善

本研究では、課題を見出す力と生活の充実向上を図る態度を身に付けるため、生徒自らが自分自身を見つめ直すきっかけとして「プレチェックとアフターチェック」、「振り返りシート」の到達度評価票を活用した。

「食物」分野におけるプレチェックでは、「調理の実践」に関する設問で「実践を行っているものが一つもない」又は「一つのみ」という生徒が５０％以上を占めた。「調理の知識」、「食文化・マナー」、「食の安全・環境」の正解率の高さと比較すると、知識はあるものの実践が伴わない実態が顕著に表れた。一方、「日頃の正しい食習慣」の設問に半数以上が「実践し、知識がある」と答えた裏で、「栄養及び食品の知識」の正解率が低いことが判明した。このことは、栄養や食品への正しい知識を身に付けることが食習慣改善の大前提になることを示すものである。これらを受け生徒の実情に留意して授業を行った結果、学習後のアフターチェックでは、３分の２の生徒が家庭で食に関する実践の機会が以前よりも増えたと回答した。

「福祉」分野の「振り返りシート」では、多くの生徒に「自分の人生や他者の存在への理解が深まり」、「高齢者や障害者を援助しようという気持ちが高くなる」傾向が見られた。それらに比較すると伸び率は小さいものの「援助やボランティア活動の実践」でも成長が見出せた。実際に高齢者とふれあう体験学習を授業に取り入れたことの効果が大きいと思われる。実践に関する項目で伸びがない生徒に関しても「高齢者の気持ちを理解できるようになりたい」「自分には不足しているところが多い」といった体験を通しての理由が挙げられており、実践に向かう意欲はけっして低くないことが推測される。

教員相互による授業評価では、実際に評価を行い、その結果をもとに授業者と参加者（評価者）で学習指導案を練り直した。この過程は、授業担当者にとっても参加者にとってもたいへんよい経験となった。「教員相互の授業評価」については、「評価者⇔評価対象者」という構図ではなく「より良い授業づくりの仲間・専門集団」という位置付けで実施すること、何のために授業評価を行うのかの確認が大切であると実感した。「練り直した授業案に沿っての授業→再評価→更なる授業改善」が今後の課題である。

2　生徒の実践力を高める授業改善

本研究は、教員間の授業評価、生徒個々の変容を指標化する「プレチェックとアフターチェック」、「振り返りシート」を中心に授業改善を試み、一定の成果を挙げることができた。生徒個々を理解し、その日常生活への実践を企図した授業を展開すること、授業を生徒や他の教員の視点（評価）を加えてより良いものへ作り上げることが、家庭科・福祉科本来の目標である「創造的能力・実践的態度」につながる。若者をめぐる様々な問題が指摘されている今日、家庭科・福祉科教育における目標へ向けた取り組みとその努力はより重要である。生徒の実践力を高めるためには、毎時間、授業に工夫と改善を行いながら努力を重ね、また、その努力の成果を教員間で共有化していくことが重要である。